



# サトリの ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗大法寺住職  
藤塚義誠さん

第81回

互いを財とし命とする。  
それが夫婦のあるべき姿です

ふじつか・ぎじょう 1943年生まれ、長野県出身。中学卒業後は身延山久遠寺にて6年間修行。その間に身延山短期大学を卒業。1965年より大法寺住職に。長野家庭裁判所伊那支部調停委員、駒ヶ根警察署少年指導委員などを歴任。現在は保護司、日蓮宗ビハーネットワーク世話人、「伊那谷 生と死を考える会」代表などを務める。今年春の叙勲では瑞宝双光章を受章。

私は「伊那谷 生と死を考える会」の代表を務めています。きっかけは1990年、上智大学の「生と死を考えるセミナー 配偶者を失うとき」を受講したことでした。住職をしていると夫や妻を亡くす場面に出会います。この講座は勉強になるのではないかと思いい、参加したのです。翌年、そのセミナーを受講していた地元、元の総合病院の前院長と医師が中心となって会が発足。私も発起人として参画することになりました。

いや終末について考えること。2つめは終活を含む死生観を養うこと。3つめは大切な人を亡くしたあとのグリーフワーク（悲しみを癒していく作業）・グリーフケア（死別の悲しみを支える心得）を学ぶことです。お互いに問題点を話し合い、自分で解決を得ることを基本理念として、老いや病、看取り、死別の悲嘆とケアなどを広く学んでいます。

自分と配偶者の最期について健康なうちに話題を文わして

現代は超高齢社会になり、子が60歳70歳になっても親はまだ生きていて、親が長生きゆえに我が子に先立たれるというケースが増えました。仏教ではこれを「逆縁」といいますが、逆縁には苦しみが生じます。子を亡くすことで親は生き甲斐を喪失するからです。そうした悲しみや嘆きをどう受け止めていけばよいのか。

これは夫婦でも同じです。どんなに仲のいい夫婦でもどちらかが残り、どちらかが先に逝くわけですから。お通夜の席には必ずどちらかが座ることになる。それが人生です。そういうときのために、夫婦はお互いの死別にどう対処したらいいかを考えなければなりません。自分の最期・連れ合いの最期は考えたくない、考えるのも怖いものです。でも、いつかその日は来ます。自分の最期について、また相手がじきあとどう生きたいか

互いの欠点を補い合うことで夫婦や家庭がで上がる

かを、健康なうちに夫婦で話し合っておくことが大切だと思います。



1569年開創の大法寺。1722年に七面堂が建立され、駒ヶ根市内を貫通する七面川の由来となった。

家庭は人生の基盤。ホツとする場所です。背伸びをしたり卑屈になることなく等身大の自分でいられる、いいところも悪いところもひつくるめて許される場所が家庭です。夫婦はどちらも何かしら欠点があり完璧ではありません。夫にないものを妻が持ち、妻にないものを夫が持っています。良き配偶者のことをベター・ハーフといいますが、より良き半分として互いに補い合って夫婦が暮らし、そこに家庭ができていくのです。

日蓮聖人の遺文に「女は夫を財とし、夫は女を命とす」とあります。妻は夫を宝物のように思い、夫は妻を自分の命のように大切にします。お互いに相手を財とし命として尊重し合うことこそ、夫婦のあるべき姿と。そうした絆を結べれば、偶然巡り合った二人であっても、それを必然に変えて豊かな夫婦関係が築けるはずす。